



本音ダダ漏れになっちゃう薬盛られて、いつも優しくておっとりしている騎士団長の旦那様が、見たことないくらい興奮した顔で溺愛してくる

「俺が怪我をしたと聞いて、急いで来てくれたのか？こっちにおいで、イリス」

人前では、決して甘い表情をしたことのない、私の旦那様、キース。

怪我をしたと聞いて、急いで駆けつけたのに、なぜか膝の上に座らされて、首に何度もキスされている……。

媚薬も盛られていて、苦しそうなキースを楽にするためにエッチなことを頑張るといったのだが……。

「俺の好きにさせてくれないか？イリスは、いつものエッチみたいに、俺に体を預けてくれればいい」

「いつもと一緒にいいんですか……？キースに任せてばかりで……」

「俺は、イリスの気持ち良くなってる姿を見られれば幸せなんだ」

「イリス様〜！」

「サラ？そんなに急いでどうしたの？」

庭で花を選んでいた私の元へ、侍女のサラが慌てた様子で駆け寄ってくる。

「ここにいたんですか！探しましたよ………」

「お部屋のお花を変えようと思って……ん、これも綺麗に咲いてる……」

「そろそろデザート作り始めないと夕飯に間に合わないですよ！今日は旦那様にデザート作るって意気込んでたじゃないですか！」

サラに言われて、今日の予定を思い出す。

今日は、旦那様——キースのためにデザートを作る約束をしていたのだ。

「も、もうそんな時間!?!」

「今日は旦那様、早く帰ってくるって朝おっしゃってたじゃないですか！」  
「ごめん！サラ、呼びに来てくれてありがとう」

私は慌てて花を抱え直し、屋敷へ向かって駆け出した。  
選んだ花を寝室の花瓶へ飾り、急いで厨房へ向かう。



「ダン！」

「奥様、そんなに急がなくても夕食には間に合いますよ」

ホーラン家のコック長、ダンは、いつも穏やかで優しい。

屋敷の料理人たちをまとめながら、毎日とても美味しい料理を作ってくれる。

「今日のデザートは何にしますか？」

「最近暑くなってきたし……アイスにしようかな。いいかな？ダン」

ダンは優しく笑いながら、材料を用意してくれる。

「もちろんですよ。そういえば、もうすぐお二人が結婚して一年になりますね」

「もう一年か、早いなあ……」

騎士団長であり、私の旦那様でもあるキース。

彼と結婚して、もうすぐ一年が経つ。

小さい頃、体の大きな男の子に虐められたことがきっかけで、男性が苦手になってしまった私。

両親が何度縁談を持ってきても、恐怖と緊張でうまく話せなくて、いつも失敗してしま

う。

——このまま結婚なんてできないのではないかと、とかなり心配をかけてしまっていた。

そんな中、キースを縁談することになり、どうせまたうまくいかないんだからお父様も私の結婚を諦めてくれたらいいのにと思いつつ、渋々縁談場所へ向かった。

俯いて、目も合わせないし、会話もできない私にキースは、本を渡してきた。

私の趣味が読書だと聞いて、おすすめの本を持ってきてくれたらしいのだ。

「旦那様が、最初の顔合わせで持っていった本は、もともと私がおすすめした本だったので

すよ」

生クリームを丁寧にながら、ニコツと笑い、話を広げてくれるダン。

「あの……星降る夜の図書館？」

「ええ。旦那様が、奥様と同じくらいの年齢の時に勧めたんですっけな」

「そうだったのね……あの本のおかげで、キースとの仲を深められたから、私にとって人生を変えてくれた一冊なの……まさか、ダンのおすすめだったなんて……ふふっ……」

数年ぶりに新事実を知って、思わず笑みがこぼれる。

初めて顔合わせをした日、キースは、ただ一緒に本を読んで、感想を話したりするだけで、無理に距離を詰めてこなかった。

本が大好きな私は、誰かと感想を言い合えるのが嬉しくて、恐怖と緊張を忘れて、いつの間にかキースと体の力を抜いて話せていた。

「初めての顔合わせ以降も、色々な本を持ってきてくれて、一緒に読むでは、感想を言い

合ってたのよね……懐かしい……」

本の感想を話すうちに、他の会話もできるようになって、本当にゆっくり関係を進めていった。

自然と、キースを受け入れるようになって、いつの間にか結婚の話を受けていた。

「奥様と婚約できた日の旦那様の嬉しそうな顔は忘れられません……」

男性に苦手意識がある私のペースにいつも、合わせてくれるキース。

出会ってから〇年経つが、最後までエッチできたのは割と最近……。

「奥様？」

「ん……！ちよ、ちよつと考え事しちゃった………アイス！あとは冷やすだけかな？」

「そうですね。夕食の時間になったら、私の方で魔導冷凍庫に入れておきますよ」

「ダン、ありがとう」

この世界は、魔力に満ちていて、それに頼って生活している。

人によって、体内に保有できる魔力量が異なっていて、魔力の多いものは魔力を多く消費する仕事にいたりする。

不規則に現れる魔物を退治する魔道士とか……。

どの世界だって、悪と対峙するヒーローのような存在は憧れであるから、人気も高い。キースもその、憧れられる存在の一人。

膨大な魔力を保有して、剣術と組み合わせて国を守る騎士団の団長。

誰にでも優しくしていつもおっとりしているのに、戦う時は、きびきびしていてとても強いらしい……。

「今日は……エッチするか……」

夕食の時間まで読書でもしようかと、寝室に戻ってきた私は、奥の扉を見つめて、ぼそりとつぶやく。

「ここ最近、キースの帰ってくる時間が遅くて、先に寝ちゃってたから、エッチできてない

し……………」

他のカップルや夫婦に比べて、関係の進展具合がゆっくりなのは自覚してるけど、キースはそれをよしとしてくれていたみたいだし、私も満足しているし……。

～年前は、こんな幸せな結婚生活を送れると思ってなかったの、本当に幸せ……。

★★★

「お帰りなさい！」

「イリス、たがいま」

ふわりと笑って、ぼんぼんと頭を撫でてくれるキース。

「着替えてくるから、その後、夕食にしようか。最近、忙しくて、一緒に食べられなくて、ごめんね」

「お仕事忙しいのわかっていますから、お気になさらないでください……今日は、私がデ

デザートをダンと一緒に作ったので、楽しみにしててください」

「……イリスが？」

キースの紫色の瞳が、嬉しそうに細められる。

「それは、仕事を頑張った甲斐があるな」

真っ直ぐ向けられる優しさに、胸が熱くなる。

★★★

「ん、ちょうどいい甘さで美味しいよ。イリスの作るデザートはいつも美味しいね」  
「お口に合ったようで、嬉しいです……」

いまだに、キースのキラキラの笑顔を向けられるとカッコ良すぎて、照れてしまう。

「あ……明日も、朝早いのですか……?」

「ん? ……明日はそんなに早くないよ。王都近くの西の森の討伐だからね」

「そ……うですか……」

明日も早くないってことは……今日、エッチできるのかな……?

早く帰ってきて、次の日の朝もそんなに早くない時は、決まってエッチしてるので、期待してしまふ。

エッチなんて絶対したくないと思ってた過去が嘘のよう……。

キースに触れると、頭の中が真っ白になるくらい気持ちよくてエッチが好きになりつつある。

「ふう、お腹もいっぱいになったし、そろそろ湯浴みしようかな……イリスも一緒に入る?」

「は、恥ずかしくて、そんなことできませんっ……!!」

「ふふっ……ごめんごめん。イリスの照れてる反応が可愛くて……笑」

★★★

サラにいつもより、念入りに体を洗ってもらって、いつもよりかわいい下着を着る……。

「ん……でたのか。おいで、イリス」

ベッドで何か資料を読んでいたキースが、シーツを叩いて、甘い顔で誘ってくる。

「久しぶりに起きているイリスに触れられる」

……ちゅっ……ちゅ、ちゅっ………♡

「んっ………ふっ………」

キースの手が肩紐にかかり、するりとずらされる。

「あっ……………あ、明かり……………」

「ああ……………忘れていた。消そうね」

いまだに、体を見られることが恥ずかしくて、部屋を真っ暗にしてエッチしてもらって……。

中をゆっくり、キースの指でほぐしてもらって、挿入して、キースが一度射精すれば終わり。

「はあ……………はあ……………んっ……………ね、眠いです……………」

「ああ、体は俺が綺麗にしておいてあげるから、眠っていいよ」

エッチの時も、たくさんキスしてくれるし、朝も後ろから抱きしめてくれる……。

キースもきつと今の関係性で満足してくれているはず……………！

★★★

「じゃあ、いつてくるよ」

「いつてらっしゃいませ……！」

昨日話していた通り、いつもよりゆっくり出発したキース。

「今日は、何しようかな……？」

いつも通り、読書をして昼食を食べ終え、庭でゆっくりしていると、庭師のロスに話しかけられる。

「奥様、そろそろ新しい花の配置を考えようと思っただけですが、一緒にどうでしょうか？」

「……楽しそうね！」

ロスと一緒に花の配置を考えていると、サラが青ざめた顔で走ってくる。

「サラ？どうしたの？」

「い、イリス様っ……だ、旦那様がつ……！！」

「キースが？」

「討伐中に魔物に襲われてしまったらしくて……」

「……え……？ほ、本当なのっ……！！」

「はい……いま、王城の医務室で治療が行われているようです……話を聞いたゼノ様が迎えに来てくださるみたいなので、王城へ急ぎ向かった方がいいかと……！！」

ゼノは、私のお兄様で、王城で、文官として働いている。

魔力の保有量がそれなりに高いので、移動魔法で迎えに来てくれるのだろう。

「イリス」

「お、お兄様っ……！！キースは、無事なのですか！？」

「俺も詳しいことは知らないんだ。とにかく、急いで医務室に向かおう」

「……はい……」

キース……。

今まで怪我をしたことは一度もないと聞いていたのにな……！

そんなに強い魔物が西の森に出たのかしら……。

どうか……どうか、無事でいて……。

お兄様の移動魔法で一瞬で王城についた。

「お兄様っ……ありがとうっ……！」

医務室に小走りで向かうが、思っていたより、城の中は静かである。

「お？キースの奥様じゃないですか。どうされました？」

「ダリオ団長……！キースが……キースが魔物に襲われたと聞いて……！」

「へ……？……もしかして、間違って伝わってしまったんですかね？キース、怪我はしてないですよ？」

ダリオ団長は、キースと同じで、王宮の騎士団をまとめる騎士団長の一人で、気さくで

とても話しやすい。

「け、怪我……してないのですね……よ、よかった……」

「どこで間違っただけで伝わってしまったのかわからないですが、とりあえず案内しますよ」

ダリオ団長が案内してくれたのは、キースの執務室。

「ダリオだ、入るぞ」

「ああ」

部屋の中には、傷ひとつないツヤツヤピカピカのキースがソファに座っていた。

よかった……怪我してない……。

じゃあ、あの連絡はなんだったのかしら……。

「奥方にキースが怪我をしたと伝わってしまったっていたみたいだな。随分焦ってこられたよう  
だ」

キースと目が合うと、二人きりの時にしか見せない甘い表情をして、手招きしてくる。怪我はしてないけど、様子がおかしい……………。

「俺が怪我をしたと聞いて、急いで来てくれたのか？こっちにおいて、イリス」  
「け、怪我はしてないのですか……………」

無事を確かめようと、キースに近づくと、ぐっと手首を引っ張られて、キースの股の間に座らされてしまう。

「はあ……………職場でイリスを抱っこできるなんて……………」  
「ちよっ……………！キース……………！皆さんに見られてっ……………！」

誰に見られても構わないというような態度で、首にちゅっちゅと何度もキスしてくる。席に座って気づいたのだが、この部屋には、ダリオ団長と、キースと同じ部隊のルーファス副団長、全ての騎士団を統括するジグルド団長がいる。

「へえ、キースはこんな顔もできるんだね」

「うわあ……他の団員には見せられね〜笑」

「ふっ……キースも奥様の前では、他の男と変わらぬということだな」

「どっ……どういことですかっ……!!」

面白そうな顔でただ見つめている心人に説明してほしいと、顔を真っ赤にして怒る。

「ああ、すみませんね、奥様。一番詳しい俺が説明しますよ」

イリスに後ろからぎゅっと抱きしめられたまま、ルーファス副団長の説明を聞く。

「今日は西の森の討伐だったんですけど、新人訓練も兼ねていてですね……新人心人が一斉に魔物に襲われてしまって、団長が助けに入ったんですけど、片方の攻撃をかわせなくてですね……」

「その攻撃のせいで、こうなってしまったのですか？一体……どんな症状で、どうしたら治

るのですか……?」

「んー、症状を簡単に説明すると、本音が漏れちゃうってやつですかね? 自白の症状が強いらしくて。特に奥様が部屋に来てから顕著に症状が出るみたいなんですよね」

「ええ……!??ど、どうしてでしょうか……」

「奥様への気持ちが強くて、今までの我慢? が漏れ出ちゃってるのかもしれないですね!」  
「我慢……」

そう言って、ははっと笑うルーファス副団長。

我慢……キースは、私との関係で我慢してることがあるのかな……。

「おい、ルーファス。我慢だなんて、イリスを不安にさせるようなこと言うな」

「おー……こわ……」

部屋の空気が一気に冷たくなる。

「我慢って言ってもマイナなことじゃないですよ? 団長の奥様への愛が強すぎて我慢し

てることがあるってだけで」

「おい、それ以上じゃべるな」

「キース……体調は大丈夫なのですか？辛いところはありますか……？」

「イリス、そんなに俺のこと心配してくれるの？かわいい……少し辛いところがあるから、俺の看病してくれる？」

「ど、どこが辛いのですか？お医者様に見てもらったほうがいいのでは？」

「イリスが看病してくれば治るから大丈夫だよ。ルーファス、後の処理は頼めるな？症状が治るまで俺は出勤しない」

「了解です。何かあれば、連絡しますよ」

「ああ……さあ、イリス、家に帰ろうか」

思ったより、キースの体調が良さそうで、安心した。

すでにキースが使用人のデルに事情を話していたみたいで、家の中は落ち着いた雰囲気だった。

「……ほ、本当にお医者様に見てもらわなくて大丈夫なのですか？」

ようやく寝室で二人きりになれたので、本当に怪我をしてないか確かめたくて、体をベタベタ触る。

「だめだな……」

「ぎ、キース？」

見たことないくらい熱い視線を向けては、前髪をかき上げるキース。

「やっぱり、どこか痛いのですか？」

「ああ、ここが今にも爆発しそうで痛い」

ぐっと体を抱き寄せられ、手を絡められたと思えば、キースの股間に誘導される。

「う……あ……お……お……きい……きい……」

いつも部屋を真っ暗にして挿入だけなので、ちゃんと触れたことがなかったキースの肉棒。

こんなに、大きい……ものが、入ってきてたの……？  
それはそうと、どうしてこんな状況に……！！？

「どうやら、自白剤と共に、媚薬も盛られてたみたいでな……珍しい魔物だとは思ってが……」  
「び、媚薬……キースの……苦しそう……これは、精液を出せば、楽になるのですか……？前に本で読んだことがあります」

「ああ……そうだね。出せば楽になる」  
「じゃ、じゃあ……私が……キースの体をなんとかしますっ……」

本では、媚薬は、精液を出せば症状が収まっていくと書いてあった。  
夫婦になったのだから、キースが辛い時は、私が頑張らないとっ……！！

「ああ……健気すぎるな、イリス……それにしても、どう頑張ってくれるんだ？」  
「……………」

性の経験も知識も少ない私の頭の中は、はてなで埋め尽くされる。  
どうやって、キースを気持ち良くすればいいのだろう……。

「あっ……いつもキースが私の……気持ちよくしてくれているように、手……で気持ち良くします……」

「それもいいが、この状態だと、何度も出さないと媚薬の症状が抜けなそうだなあ……イリスの手だけじゃ限界があるんじゃないか？」

「そ……そんなっ……どうすれば……」

「俺の好きにさせてくれないか？イリスは、いつものエッチみたいに、俺に体を預けてくれればいい」

「いつもと一緒にいいんですか……？キースに任せてばかりで……」  
「俺は、イリスの気持ち良くなってる姿を見られれば幸せなんだ」

ちゅっ……ちゅくっ……れろっ……くちゅ……くちゅっ……ぬっ……

最初から舌を絡ませる深いキスを繰り返される。

「んんっ……ふあっ……んっ……♡♡♡」

こんな激しく舌絡ませるきす……したことないっ……気持ちいい……♡

「はあ……イリスの唾液、甘くて……美味しい……」

「はあ……はあ……きすっ……激しくてっ……息っ……上手に  
できませんっ……」

「……そうだね、こんな激しいキスするの初めてだもんね……もっといっぱい激しい  
キスして、上手に息継ぎできるようになろうね」

くちゅっ……ちゅっ……くちゅ……れろっれろっ……♡

「んはっ……んんっ……ふっ……ふああっ……♡」

「苦しくなったら、お鼻で息するんだよ、イリス」

「んっ…………ふっ…………ふっうう…………んんんっ…………」

口の中、舐められるのっ…………気持ちいいっ…………♡

「とろとろイリス可愛いな…………舌、いっぱい絡ませるキス、気持ちいい？」

「きもっ…………ちいい…………頭の中っ…………真っ白になっちゃいますう…………」

陽の光が入ってきて、寝室は、まだ明るい。

舌を絡める深いキスをしながら、ワンピースの腰紐が緩められ、簡単に下着姿にさせられる。

「あっ…………キース…………明るい…………」

「うん。今日は明るいままね」

「そ…………んなっ…………」

「いつもイリスがどうしてもって言うから真っ暗にしてエッチしてたけど、ほんととは、体の隅々まで見て、可愛がりたい」

耳元で、甘い声で囁かれ、体がぞくつと震える。

「でもっ……………恥ずかしい……………し……………キースに嫌われたら……………」

「どんなイリスでも愛してるよ。夫である俺にだけ、イリスの全部見せてほしいな」

そんなこと言われたら……………。

ずっと怖かったけど、キースになら……………と、組んでいた腕をゆっくり元に戻していく。

「イリス、俺を信じてくれて、嬉しいよ。いっぱい気持ちよくしてあげるね」

ブラジャーを簡単に外されて、ピンク色の乳首が陽に照らされる。

「やっ……………」

やっぱり恥ずかしいっ……………！！

胸を隠そうとすると、大きな手で手首を掴まれてしまう。

「だーめ……………こんな綺麗な体なんだから、もっと自信持たないとだめでしょ？イリス」  
じっと目を見つめながら、れろつと乳首を舐められる。

「んあぁづ……………♡」

れろづ…………ちゅづ…………じゅづ…………れろれろづ…………♡

口に含んでは、じゅつと吸って、舌尖でれろれろと左右に揺すってくる。

「はぁ……………見てごらん？イリスの乳首、俺に吸われてぷっくり腫れて、可愛くなってる」

「はぁ……………はぁ……………」

キースに言われて、恐る恐る視線を下に向けると、乳首がほんの少し濃いピンク色に染

まって、ぶつくり腫れている。

「……おつきくなってるっ……………やあっ……………恥ずかしっ……………」

「恥ずかしくないよ。俺にいっぱい虐められて、エロくなつてくイリス、もつと見たい」  
れろづれろづ……………ちゅばづ……………じゅっうう……………

もう片方の乳首をキースの綺麗な指でコリコリと虐められる。

「んあああづ……………らめづ……………乳首っ……………気持ちくでづ……………変になるうづ……………  
♡!!!」

「ん……………気持ちよくて、変になっちゃうイリス、見せて」

らめづ……………らめづ……………頭の中っ……………真っ白になっちゃううづ……………♡!!!

「乳首虐められるの気持ちいいね……………おまんこも濡れ濡れ」

乳首をいじめながら、下着の上から、おまんこを撫でてくるキース。

「んっ…………ふあんっ…………♡」

「可愛いパンツ、汚れちゃうから、脱いでしまおうか」

するりとパンツを脱がされ、ツーッと愛液の糸が引いて、恥ずかしい…………！  
おまんこも、キースにじっくり見られちゃうのっ……………！！？

「イリス、ベッドにゴローンっしてして、俺におまんこじっくり見せてね」  
「あうっ……………ふっ……………」

軽く体を押され、ベッドに押し倒されてしまう。

ベッドへ横になった私を見つめながら、シャツを脱ぐキース。  
彫刻のような整った筋肉に目が離せなくなる。

「イリス、足、開いて、俺に可愛いおまんこ見せて」

キースの大きな手が、私の震える太ももを優しく掴む。

そのままぐっと開かれ、閉じていた大陰唇が、クパアと開いていく。

「ううっ……………恥ずかしい……………」

恥ずかしすぎて、顔を手で隠す。

「俺におまんこ何されるか、見てなくていいのか？イリス。好き放題されてしまうよ」

そういうと、キースは、親指で大陰唇をさらにクパアと開き、顔をぐっと近づける。

生暖かい息がおまんこにかかって、不審に思い、顔を隠していた手をずらすと、キースの舌が今にもクリトリスについてしまいそう。

「……………!!!!!!」

焦りすぎて、言葉が出てこない。

れろっ……………

意地悪な顔をしながら、クリトリスをれろっとなめてくるキース。

「だっ……………めええっ……………汚い……………こんなところ……………舐めるなんて……………！」

「イリスの体に汚いところなんてないよ。それに、他の夫婦は、当たり前にお互いの性器を愛撫して気持ち良くしあうんだよ」

「……………え……………う……………う……………そんな恥ずかしいこと……………」  
「みんなしてることだから恥ずかしいことじゃないでしょ。それにおまんこ舐められるの気持ちよくて、はまってしまいかもしれないね」

そういうと、私が足を閉じないように、太ももをぐっと押さえて、力を入れた舌先で、ち

ろちろ舐めてくる。

「ふあづあああづ……んあああづ……らめづ……♡！……そこっ……舐めるのづ……らめづですづ……♡！……！」

与えられたことのない快楽で、混乱するが、それ以上に気持ちよさが勝ってしまっ、おまんこを濡らして興奮してしまっ。

何これっ……知らない……こんな気持ちいいの知らない……♡

「クリ、舐められるの気持ちいい？お目目とろとろになってる。気持ちいいって教えて、イリス」

「きもっ……ちい……♡！……そこっ……舐められるとっ……らめつなのお……きちやいそうなのっ……♡」

「ああ、クリイきしそうなんだね。絶頂しそうになったらどうするんだっけ？」

絶頂しそうになったらっ……なったら……。

「い、いくつ………♡キースっ………おまんこっ………いくのっ………♡………」  
「ん、いくいく言うの上手。ちゃんと俺との約束守れてるね。ご褒美に、クリいっぱい舐めてあげる」

初めてエッチなこととした日から、絶頂しそうになったらキースにいくいくって伝えないと絶頂させてもらえないと教育？されていた。

れろっれろっ………ピンっピンっ………

「やあああっ………♡………しよれっ………だめええっ………クリっ………ピンっ  
ピンっしゅるのっらめええええ………♡………♡………」

クリを弾かれるたびに、体がビクビク震えて、絶頂の波がぐわんぐわんと何度も迫ってくる。

「イリスは、ここピンピンされるのが好きなんだね」

「しゅきいいい……いくついくつ……いくうう……♡！……！」

ビクっ………ビクっ………♡

頭の中が真っ白になって、クリトリスがじわっと暖かくなる。

中弄られていくのより、ほんの少し浅めだけど、頭が真っ白になってふわふわするのは変わらない。

「やっ………い……ま、いったのっ………らめっ………♡！すぐ、いじめるのらめっ………♡！……！」

いったばかりで、休みたいのに、キースはそれを許してくれない。  
容赦無く舌で熱を持ったクリトリスをピンピン弾いてくる。

「クリ、ピンピンするたび、おまんこもアナルもヒクヒクしてかわい………」

「んっ……………やあつ……………見ないでえ……………恥ずかしい……………やだあ……………」  
「今日は、俺の好きにさせてくれるんだろう？ 隅々まで見るよ」

クリを舐めていた舌をどんどんにずらしていくキース。  
愛液でたっぷり濡れた蜜穴にヌコヌコと舌を入れ始める。  
解放されたと思ったクリも、指でピンピン弾かれて、甘い声が漏れ続ける。

「んあああぁぁぁ……………♡♡♡指でピンピンもっ……………中につ……………舌入れるのもらめっ……………♡♡♡！！！」

「イリスの愛液甘い……………舐めても舐めても奥から出てくる……………」  
私を見つめながら舌をれっ、と出してからかってくる。

「やあぁぁぁぁ……………♡♡♡気持ちはいいっ……………♡♡♡」

「ん、どこが気持ちいい？」

「クリも……………中も……………全部うう♡♡♡！キ、キースに触られてるとこっ……………」

全部気持ちいいいい……………♡♡♡！！！！」

「はあ……可愛いなあ……………イリス」

ぬぼっ……………ぬぼっ……………ぴんっぴんっ……………♡

「またきちやうっ……………気持ちいいのっ……………きちやうのおおっ……………」

「どっちでいくの……………？くり？中？」

「んっ……………くりっ……………くりっ……………ぴんぴんされてっ……………いくううっ……………♡！！！！」

さっき絶頂したばかりなのに、すぐ絶頂の波が襲ってくる。

キースを見つめながらいくくと必死に伝えると、クリを虐める指の速度も、ぬぼぬぼ舌を中に挿入する速度も早めてくる。

「んあああぁっ……………♡！！！！……………いくいくっ……………♡！！！！」

キースの舌をぎゅっと締めながら、絶頂する。

視界がぼやけて、自然と涙が出てくる。

気持ちいいっ……………くりでいくのっ……………気持ちいいっ……………。

「はあ……………はあ……………♡……………ん……………♡」

「そろそろ媚薬でおつきくなった俺の受け入れるために、おまんこ慣らそうね」

クリイキの余韻に浸って、ぼーっとしてしていると、キースの太い指をぬぼっと挿入される。

「んっ……………ふああっ……………♡」

「おまんこいっぱい舐めて濡れ濡れになったから、奥まですぐ入るね」

ぬぼっ……………ぬぼっ……………♡

太い指が根本までぬぼぬぼ容赦無く出し入れされる。

頭の中がずっと真っ白で、おかしくなるっ……………。



中っ……………いつちやうううづ……………♡！！！

「い……………くっ……………♡！！！」

キースの指をきゅうきゅう不規則に締め付けて、絶頂する。

「ん……………！！！！……………たのおっ……………とめっ……………てええ……………！！指  
っ……………やらああ……………」

「俺の指でもっと乱れるイリスが見たい……………」

足を閉じないように、片方の裏太ももを押さえられ、耳をくちゆくちゆ舐められる。

……………じゅぶづ……………じゅぶづ……………ぬぼっぬぼづ……………くちゅ……………ちゅ……………れろっ……………

「ふっ……………うううう……………♡またっ……………きちやう……………」

「もういくのか？」

「うんっ……………うんっ……………気持ちいいのっ……………気持ちくてっ……………らめなのっ……………いくっいくっいくっ……………！」

耳の中舐められて、興奮して、すぐいっちやうっ……………！  
絶頂しても、キースは、おまんこを虐めるのをやめてくれない。

「やあああああああづ……………そこっ……………ずっと、トントんされるのらめなのっ……………！」

「気持ち良すぎて、涙が出てきてしまったね」

今にも涙が溢れそうな目尻にちゅっ唇を触れさせて、優しい顔で見つめてくるキース。表情は、優しさで満ち溢れているのに、おまんこを虐める手は容赦無く、そのギャップに興奮してしまう。

「気持ちいいいっ……………もっ……………いいのっ……………もう……………もう……………できるのっ……………！」  
「んー？何ができるの？」

「ふっ……………うう……………えっちできるっ……………」

「ふふっ……………えっちはもうしてるでしょ？もつと具体的に何がどうできるのか教えてもらん？」

ぬぼっ……………ぬぼっ……………♡……………！！！！！！

「あうづ……………ふっ……………あんづ……………♡……………き、キースのっ……………おまんこにっ……………入るうう……………もう……………もう……………入れてえええ……………」

「まだまだ恥ずかしがり屋さんだね、イリス。でも、一生懸命言えたから、イリスのお願い聞いてあげる」

ぬぼっとおまんこから抜けたキースの指は白く濁った愛液で包まれていた。

「おっ……………きいっ……………」

暗い部屋でしかエッチしたことなかったから、キースの性器をちゃんと見るのは初めて。

こんなに大きいのが、毎回私のおまんこに入ってたの……？  
信じられない……………。

無意識に腰が後ろに引けてしまう。

「ああ、いつも真っ暗なお部屋でエッチしてたから、俺のをちゃんと見るのは初めてだね。  
怖くなってしまったかな？」

「だって……………そんな大きいなんて……………」

「いつもよりほんの少し大きいだけだよ。イリスのおまんこはちゃんと受け入れられるよう  
になってるよ」

そういうと、お尻の下にふかふかのクッションを挟んでくるキース。

おまんこが高い位置にきて、挿入部分がよく見える体勢にさせられる。

「こうすれば、イリスのおまんこに俺のが入るところよく見えて、怖くないだろう？」

大きくて赤黒い肉棒が濡れたおまんこをヌコヌコ擦ってくる。

クリトリスに当たるときに、腰がビクビク震えてしまう。

キースは、肉棒が愛液で濡れたのを確認し、先端を密穴にくちゆりとくつつける。

「はあっ……………んっ……………♡」

ぬぶぬぶと先端が少しずつ入っていく様子から目が離せない……。

太いところを抜けるまでは、少しきつかったが、抜けてしまえば、すぐ根本まで収まっています。

「は、いった……………あ……………すごいっ……………中っ……………」

「ね？イリスのおまんこ、俺のを根本までぐっぽり啜えられたでしょ？馴染んだら、奥いっぱい突くね」

私を見下ろしてくるキースの顔が、見たことないくらい雄の表情で、子宮がきゅんと疼く。

「期待してる？奥いっぱい突くねって言ったら、おまんこきゅって締まった。かわいい……………」  
「あっ……………ん……………♡くりっ……………らめっ……………」

虐められて、ぼつてりと腫れたクリトリスをピンピン弾かれる。

おまんこがきゅきゅ勝手に締まって、中も気持ちいい……………♡

「ん……………もうそろそろ動くね」

「……………んうっ……………♡♡♡……………あっん……………♡……………ふあんっ……………♡♡♡」

キースの腰が前後に動き、肉棒がヌポヌポと蜜穴に出し入れされる。

どんどん激しくなって、奥をばちゅばちゅ突かれる。

「あんっ……………あんっ……………♡！！！！おっくうう……………らっめええ……………奥っ

気持ちいいいい……………♡！！！！ふえええ……………♡」

「はあ……………イリスの中……………気持ち良すぎだな……………」

キースの表情が少し険しくなって、甘い吐息が溢れる。

キースもっ……興奮してる………気持ちいいんだ………。

バチュっバチュっ……パンっ……パンっ………♡！！！！

「きちやうつうう………そんなっ………奥いっばいちゆかれたら………すぐっ………いつちやい  
ますっ………♡！！！！」

「ん………いいよ………好きな時に好きなだけいきな？イリス………」

甘やかすように、くちゆくちゆと舌を絡めるキスをして、追い込んでくるキース………。  
だめええ………そんなエッチなキスされたらっ………我慢できないっ………♡

「イクっ………イクっ………♡！！！！」

ビクッ………ビクッ………

キースの肉棒をぎゅうぎゅう締めて絶頂する。

全身が勝手にビクビク震えて、頭の中が真っ白になる。

中でイクの、こんなに気持ちよかったっけ……………？

「……………!!!なんっ……………れっ……………いま……………イっただけなのにっ  
……………むりつれす……………ずっと気持ちいいのっ……………無理いいいい……………♡!!!」

意地悪キースが余韻に浸らせてくれなくて、イっただけなのに、奥をばちゅばちゅ突いてくる……………。

「なんでって……………今日は俺の好きにさせてくれるって約束だっただろ……………？」  
「ううっ……………」

何も言えず、ただ与えられる快楽を一生懸命受け入れる。

肉棒がぬぼぬぼ出し入れされるたびに、愛液がおまんこからこぼれ落ちてくる。

「ふっ……ううづ……気持ちいいい……奥っ……奥うううづ……♡！」  
「そんなにおねだりしなくても、いっぱい突いてあげるからっ……」

バチュっつっづ……パンづ……パンづ……ぬぼづ……♡！！

「やあああああづ……♡！！—我慢できないっ……れすっ……またっ……いくううう  
う……♡！！—」

「ああ……俺も……つつっ」

どくどくと子宮に精液が注がれる。  
キースの肉棒が中でビクビク震えてる……。